

## 中国詩文における蓬と転蓬

中渡瀬 将之

### 一

漢魏六朝詩を見ていくと、しばしば「転蓬」という言葉に行き当たる。秋に枯れて根から離れ、風に吹かれ丸くなつて転がる雑草のことで、転じてあてもなく流浪することのたとえとして用いられる。風に吹かれて飛んでいくことから「飛蓬」、秋に根から離れて転がることから「秋蓬」などとも言われる。『芸文類聚』卷八十二「蓬」の項に引く漢代の詩に「転蓬離本根、飄之畏長風」とあり、そのモチーフは古くから使用されてきたことが分かる。

ところで、「蓬」は和訓では「ヨモギ」とされる。し

かし、ヨモギをイメージしたとき、このように根から離れ転がつていく姿を想像できるだろうか。中国の詩文にしばしば登場する転がる蓬は、果たして我々が日本で想像するヨモギと同じものなのか、本稿では、この点について考察してみることにした。以下、中国詩文に登場する「蓬」に対して日本で想像されるものを「ヨモギ」と区別して表記する。

### 二

ヨモギはキク科の植物であり、世界中のいたるところに分布しその種数は250種とも400種ともいわれ、日本でも

30種ほどが見られる。その中でも日本でよく見られるのは、カズザキヨモギ (*Artemisia princeps*)、ニンヨモギ (*Artemisia indica*)、オオヨモギ (*Artemisia montana*) の三種であるが、ヨモギ属には個体が多く変異に富むため種の区別が困難で、日本ではヨモギ属のものを総称してヨモギと呼んでいることが多い<sup>[1]</sup>。ヨモギという名前の由来に関しては、四方に根茎を伸ばして繁茂するという意味から、四方草 (よもぎ) という説や「よく燃える草」の「善燃草 (よもぎ)」、「よく萌えでる草」の「善萌草 (よもぎ)」など諸説ある。ヨモギの存在は古くから知られ、世界中の民族と深いかかわりを持つっており、人間にとつてもっとも身近な野草の一つといえる。日本でも、食用の山菜や医療用の薬草として古代の人々と密接な関わりを持っていた。食用では草餅や天麩羅、医療用としては葉を乾燥させ裏面の白い繊維を取りだしモグサとして使用されることもあった。また、古くから邪気を払うと信じられ、端午の節句に、軒先につるしたり菖蒲とともに浴湯へ入れたりする風習もあった。

ヨモギは不思議なことに、東西を問わず魔除けの力を持つ植物と考えられており、さまざまな民族の残した文献にその名前を見ることができる。ヨーロッパでは、古代ギリシャでヨモギの一種であるニガヨモギが月と豊穡の女神アルテミスに捧げられたとされ<sup>[2]</sup>、古代ローマ

ではニガヨモギを身につけると毒薬を消し、災難を避け旅に疲れないと信じられていた。ドイツ、オランダ、イギリスなどでは、六月二十四日の聖ヨハネの祭日、あるいはその前夜に採集したニガヨモギを焚き火でいぶしたり戸口につるして魔除けにしたという。<sup>[3]</sup> プリニウスもまた『博物誌』に旅行中の魔除けのためにヨモギを身につけたと記している。アジアでも、インドやチベットでヨモギは健胃、駆虫剤として用いられるほか、魔除けのためのお香としてもたきしめられる。中国では、六世紀頃の荊楚地方の年中行事や風俗習慣が記録されている『荊楚歲時記』の中に五月五日にヨモギを採集して人形を作り、門戸の上に掛け毒気を払ったという記録がある<sup>[4]</sup>。また、ヨモギは日本の先住民族アイヌの伝承にも数多く登場し、伝承によるとアイヌの始祖はヨモギの茎を束ねて、ヨモギの槍を持ち、腰にヨモギの刀を差した人形を作り、病魔や悪神を追い払ったといわれている<sup>[5]</sup>。このように、ヨモギが世界中で魔除けの力があると考えられた理由として、その強い香りが挙げられる。ヨーロッパでのニンニクやハーブ類、アジアでの菖蒲や菊に代表されるように香りの強いものは東西ともに古来魔除けの力があると考えられた。強い芳香を放つ植物は薬用効果を持つものが多く、病を邪気によって起こると考えていた古代の人々は、その強い香りに眼に見えないものを

払う力を感じたのではないか。ヨモギの場合、食用にも薬用にもなるという万能さと、世界中いたるところに分布するという分布域の広さとが世界中でそのように考えられるようになる要因となつたと考えられる。

これまでに紹介した「ヨモギ」は、分類的には細かな違いがあるにせよ、すべて学名に「*Arenisia*」を冠するキク科ヨモギ属の植物である。だが、これらの植物が詩の中にあるように、秋になると根から離れ転がつていくことはない。つまり、転蓬の蓬は我々が日本で想像するキク科ヨモギ属の植物とは異なるものなのである。

ではなぜ、蓬の字をヨモギと読むのか、このことについて植物学者である牧野富太郎氏は、ヨモギに蓬の字を当てるのは誤りで、それは源順の『倭名類聚鈔』<sup>8</sup>に蓬を与毛木（ヨモギ）として以来の間違いであるとしている<sup>7</sup>。つまり、日本でヨモギに蓬の字を当てるのは古くからの誤りであつたのである。では現在、中国で蓬はどのような植物とされているのだろうか。辞書を引いてみると蓬はムカシヨモギ属（*Erigeron*）の植物とされている<sup>8</sup>。対して日本でおなじみのキク科ヨモギ属（*Arenisia*）には蒿や艾という漢字が当てられている。ムカシヨモギ属とはキク科の多年草あるいは一年草で、ヒメジヨオンなどと近縁で類似している植物である。ちなみに、ヒメジヨオンの中国名は一年蓬である<sup>9</sup>。

蓬の字は中国最古の詩篇『詩経』の中でもみることができ、朱熹はその『詩経』の注釈書『詩集傳』卷三「伯兮」において蓬について次のように記している。

蓬草名其華似柳絮聚而飛如亂髮也<sup>10</sup>。  
蓬は草の名前である。その花は柳のわたのように集まり乱れ髪のごとく飛んでいく。

キク科の植物の中にはタンポポのように綿毛をつけて種を飛ばすものが多く、ムカシヨモギ属もその中の一つである。朱熹は、花のあとが「わた」となり乱れ髪のように各地をさまよい飛んで転がり行くことをもって、蓬がムカシヨモギであることを説明しようとしたのである。現在においても、中国で蓬がムカシヨモギ属の植物とされるのは<sup>11</sup>、おそらくこの朱熹の説に従つたのだと考えられる。

しかし、『淮南子』十六卷「説山訓」には<sup>12</sup>、

見窾木浮而知為舟、見飛蓬轉而知為車、見鳥迹而知著書。

中空になつている木が浮いているのを見て舟をつくることを知り、蓬が風に転がされるのを見て車を作ることを知り、鳥の足跡を見て文字を書くことを知った。

という一文がある。これを見ると蓬は、わたが風によつて飛び散ずるというよりも、やはり地面をごろごろと転がっていく植物であつたように思われる。このことに關して、植木久行氏は転蓬には、朱熹のいうように蓬のわたりや花が転がり飛ぶという説と枝茎が転がり飛ぶという説の二説あるが、文献での蓬に關する表現を見る限り、枝茎が転がり飛ぶという説が正しいだろうと結論づけている<sup>13</sup>。また、先に紹介したように、古くから漢詩の中で蓬は、髪が乱れている様子を表現するための比喻としても多用されている。『詩集傳』での一文中から察するにおそらく朱熹は、わたが乱れ髪のように飛ぶことから、蓬を髪が乱れている様子を表す比喻として使うようになったと考えていたのだと推察できる。しかし、詳しくは後述するが、古い文献での使われ方から蓬には荒地地に生える雑草というようなイメージが強くあることが分かる。蓬が乱れ髪を表すのは、手入れをしていないボサボサ頭のことを、同様に手入れのされていない土地に雑草として生える蓬に例えて表現したことに端を発するという方が正しいだろう。枝茎が転がり飛ぶとした場合、このムカシヨモギ属の植物もまた、秋になると根から離れ転がっていくということはない。先に紹介した牧野氏もムカシヨモギを蓬にあてるのは誤用として、蓬がムカシ

ヨモギ属の植物であることを否定している<sup>14</sup>。つまり、中国詩文に登場する轉蓬の蓬は現在の中国で蓬とされる植物とは異なるものを指していたのである。

### 三

次に、視点を変えて根から離れ転がっていく植物にはどういふものがあるのか、という観点から蓬とはどの植物を指すのかを考えていくことにする。

根から離れ転がる植物には、タンブルウィードと呼ばれる植物群が存在する。タンブルウィードとは、西部劇などでよく見ることが出来る植物で、秋に根元から折れて球状になり野原を風に吹き散らされる植物の総称である。アカザ科の數種がそれにあたり、元々の原産はアフリカやユーラシアの北部の乾燥地帯である。秋になり根から離れ、球状になり、風に吹き散らされる、これは中国詩文に登場する転蓬にびつたりの植物といえるだろう。寺井泰明氏は李時珍『本草綱目』の中に「飛蓬はすなわち藜蒿の類<sup>15</sup>。末大にして本小なり。風之を抜くこと易く、故に飛蓬と号す。」とあることから蓬とはアカザ科の植物であり、一つの種類に断定できないのではないかと言及している<sup>16</sup>。また、牧野富太郎氏は、蓬はアカザ科のホウキギの仲間ですらも単に一種のみに限られ

たものではないのではと指摘している「19」。

アカザ科とは、約100属1500種からなり世界中に分布している、特に乾燥した土地やアルカリ性の土地、海岸の砂地などに多い植物である。中にはホウレンソウやビートといった食用になるものやアリタソウのように薬用になるものも多く存在する。世界中に分布しており、食用や薬用にもなる点などキク科ヨモギ属 (*Arenaria*) の植物と共通点も多い植物である「18」。ちなみに、中国語では藜と表記される。ただし、寺井氏は『礼記』の「射人桑弧蓬矢を以つて、天地四方を射る」や『西京雜記』の「九月九日、茱萸を佩び、蓬餌を食べ、菊華酒を飲めば、人をして長寿ならしむ。」など蓬という字を魔除けの力があるキク科ヨモギ属 (*Arenaria*) の植物と考えられるものにも使用していることも考慮すべきだと指摘している。

これまでから、日本のヨモギを蓬に当てるのは正確ではなく、また秋になると根から離れ転がる植物には、アカザ科のタンブルウィードと呼ばれる植物群が存在することが分かった。このことを踏まえて、次に中国の文献に登場する蓬の使われ方を見ていく。漢詩は古典や故事を踏まえながら自分の感情や情景を織り込んでいく手法をとることから、正確にどのようなものであるということより、テーマに沿うイメージがある題材を使う事が重

要視される。したがって、時代が下るにつれ蓬とは正確にどの植物を指すのか理解して作詩をしている文人は少なくなっていると考えられる。そこでまずは、より古い時代の文献に注目してみたい。先に、蓬という字が『詩経』の中にもみえることを述べたが、そのように蓬は古くから中国の文献の中に登場する。『四部叢刊』を利用して検索してみると「19」、十三経のうち、『詩経』、『礼記』、『春秋左氏伝』、『爾雅』の四書に蓬という文字が登場する「20」。

『詩経』に登場するのは次の三箇所である「21」。

①彼茁者蓬。壹發五豝。(國風召南駟虞)

あの蓬の生えた草原で狩りをする。矢を放てば一発に五匹の豝を獲る。

②伯也執殳。為王前驅。自伯之東。首如飛蓬。(國風衛伯兮)

夫は出征して殳を執り、王の車の先駆けとなつていく。夫が東に出陣してから、私の

頭は髪の毛の手入れも怠りがちで、髪の毛も梳らず、蓬の草のように乱れてしまった。

③其葉蓬蓬。(小雅魚藻之什采芣)

その葉は青々とよく茂っている。

蓬の使われ方としては、

① 草原に生える雑草

② 髪の毛が乱れてボサボサなことを表現するための比喩

③ 葉が茂っている様子を表す形容詞

という使われ方をしている。

次に『礼記』ではどのような使われ方をしているのか見てみると「22」、

a 行秋令。則其民大疫。焱風暴雨至。藜莠蓬蒿並興。

(「月令」)

秋の政令を行えば、人民の間に悪い病気が大流行し、旋風と暴雨とがいつせいに襲来

し、藜・莠・蓬・蒿などの雑草がはびこる「23」。

b 國君世子生。…三日。卜士負之。吉者宿齋。朝服寢

門外。詩負之。射人以桑弧蓬矢六。

射天地四方。(「内則」)

国君の世継ぎが生まれたら…三日目に占って選んだ士に命じて子を負わせる。占って

吉となる士は、一夜潔齋し、朝服を着て朝廷に上が

り、寝門の外で子を受け、桑の弓

と蓬の矢六筋とで天地四方を射る。

c 儒有一畝之宮。環堵之室。篳門圭窬。蓬戶甕牖。

(「儒行」)

儒者は一畝の屋敷の中、一緒の狭い家に住み、いはらの門とくぐり戸があり、蓬で編

んだ戸と小さい丸窓があるだけである。

d 故男子生桑弧蓬矢六。以射天地四方。(「射義」)

男子が生まれると、桑の弓と六本の蓬の矢とで、天地四方を射る。

蓬の使われ方としては、

a 藜(アカザ)と並んで荒れた地に蔓延る雑草

b 悪気を祓う払邪の矢

c 扉が粗末であることを示す表現

d 悪気を祓う払邪の矢

となつている。bとdでは悪気を祓う払邪の矢として蓬の矢が取り上げられているが、キク科ヨモギ属(Artemisia)のヨモギが魔除けの力があると世界中で考えられていたことは先に述べた。『礼記』でのこの蓬の使い方は、蓬をキク科ヨモギ属(Artemisia)のヨモギとし

て考えていたことを示すといえる。

『春秋左氏伝』では「24」、

子産對曰、昔我先君桓公、與商人皆出自周、庸次比耦、以艾殺此地、斬之蓬蒿藜藿而共處之、世有盟誓、

以相信也。(昭公傳十六年)

子産は答えて言った「昔、我が鄭国の先君桓公と商人らは、ともに皆、周からやって来ましたが、並んで力を合わせてこの土地を開墾し、よもぎやあかざの雑草を切り払って一緒に住み、代々誓いを立てて、お互いに信じあつてきました。

というように、ヨモギとアカザを並べて荒地地に蔓延る雑草の一つとして扱っている。

中国最古の古典用語の語釈・類語辞典である『爾雅』では「釋草」の項に「齧、彫蓬、薦、黍蓬」とあつた。その中の「彫蓬」にはマコモの実という意味があり「25」、これは、『通志』巻七五「昆蟲草木略」草類の項の

菰曰蓬、今人謂之茭、云云、彫蓬者、米茭也、其米謂之彫胡、可作飯、故曰齧。

という記述に拠るものである。これによると「蓬」とは

マコモだということになる。だが、イネ科の仲間であるマコモと、今までに出てきたキク科ヨモギ属の植物、あるいはアカザ科の植物とでは姿かたちに大きな差異があり奇異な印象を受ける。ただし、食用・薬用になり、そこらによく生えている雑草という点は共通項といえる。ではさらに、その他の漢代より前の主な文献の中ではどうか調べてみる。

『管子』では「26」、

I 飛蓬之間、不在所竄、燕雀之集、道行不顧。(第一「形勢第二」)

風に吹かれて転がるよもぎのような根拠のない名前は、誰も敬意を払わず、すずめなどの小鳥の群は、道行く人はふり返りもしない。

II 時雨甘露不降、飄風暴雨數臻、五穀不蕃、六畜不育、而蓬蒿藜藿。(第八卷「小匡第二」)

ほどよい時の雨も甘露も降らずに、暴風や大雨がしばしば襲ってきます。五穀は生育せず、家畜は繁殖せず、よもぎやあかざの雑草ばかり生い茂っています。

III 今鳳皇麒麟不來、嘉穀不生、而蓬蒿藜莠茂、鴟梟

數至。(第十六卷「封禪第五十」)

今日では、吉兆とされる鳳凰や麒麟は到来せず、立派な穀物は成育せずに、よもぎ・あかざ・はぐさなどの雑草が繁茂し、ふくろうのような凶悪な鳥がしばしばやってきます。

IV 無儀法程式、蜚揺而無所定、謂之蜚蓬之間。蜚蓬之間、明主不聽也。無度之言、明主不許也。故曰、蜚蓬之間、不在所賞(第二十卷「形勢解第六十四」)

礼儀や法度に一定の方式などなく、定着することなく風にかかれ転がるよもぎのような名声というのである。そのような名声には、賢明な君主は耳を傾けることはない。法度にはずれた発言を賢明な君主は聞き入れないのである。ゆえに「風に吹かれ転がる蓬のような名声は、誰も敬意を払われない」と言われるのである。(蜚蓬の蜚は飛に通ず。)

蓬の使われ方としては、

I 風に吹かれ転がる植物

II 藜と並んで、荒地地に蔓延る雑草

III 藜と並んで、荒地地に蔓延る雑草

IV 風に吹かれ転がる飛ぶ植物

となつている。IとIVで蓬は転がる植物となつているこ

とから、アカザ科などのタンブルウイードとして扱われていることが分かる。

『山海経』では「27」、

i 西王母其状如人豹尾虎齒而善嘯蓬髮戴勝(第二卷

「西山経」)

西王母はその姿、人のように豹の尻尾、虎の歯でよく嘯き、乱れた髪に玉の簪をのせ、天の災いと五つの刑を司る「28」。

ii 蓬萊山在海中(第十二卷「海内北経」)

蓬萊山は海の中にある。

iii 大荒之中有山名曰塵鑿鉅、日月所入者。有獸左右有

首名曰屏蓬(第十六卷「大荒西経」)

大荒れの中に山あり。名を塵鑿鉅、日月の入るところ。左右に首のある獸がいて、名を屏蓬という。

iv 北海之内有山名曰幽都之山、黒水出焉、其上有玄鳥

玄蛇玄豹玄虎玄狐、蓬尾(十八卷「海内経」)

北海の内に幽都の山という山がある。黒水がここ

より流れる。山の上には黒い鳥、黒い蛇、黒い豹、

黒い虎、黒い狐がいてその尾は蓬である。

というように使用され、どれも植物としては使われていない。ただし、iの乱れ髪を蓬髪と表現するのは、荒れ果てた地に蔓延る蓬のイメージからきていると考えられる。

『戦国策』では〔2〕、

A 王一日山陵崩、子伋立、士倉用事、王后之門、必生蓬蒿。(第三卷「孝文王」)

王が崩御し、子伋さまが立ち士倉が政治を執るようになりますと、お後の門は、必ずや荒れ果てて蓬が生い茂ることとなります。

B 雒陽乘軒車蘇某、家貧親老、無罷車駕馬、桑輪蓬篋羸。(第六卷「恵文王」)

雒陽の蘇某と申すものは、家は貧しく親は老い、みずばらしい車や馬、桑の木で作った車輪や蓬を編んで作った車の箱もありません。

Aでは荒れ地に蔓延る雑草、Bでは粗末なことを示す表現としてそれぞれ使われている。

また、『晏子春秋』には

魯昭公失國走齊、景公問焉、曰君何年之少、而棄國之蚤奚道至於此乎、昭公對曰、吾少之時、人多愛我者、吾體不能親、人多諫我者、吾志不能用、是則內無拂而外無輔、輔拂無一人、諂諛我者甚衆、譬之猶秋蓬也、孤其根而美枝葉、秋風一至、根且拔矣。

(卷五／内篇雜上第五)

魯の昭公が国を追われて齊に亡命した。景公は尋ねた。「あなたは統治わずかでなぜ亡命することになったのでしょうか。」昭公は答えて「私は若い頃多くの人に愛されましたが、礼をもつて彼らと接することが出来ませんでした。多くの人が私を諫めました。私はそれに従うことが出来ませんでした。そのため、内に補佐する者も外に力添えするもなく、媚びへつらうものばかりが多かったのです。これを例えるに秋蓬のようなものです。一つの根に美しく枝葉を飾ったのですが、秋風がひとたび吹けばたちまち根から抜けてしまいました。」

という話が載せられており、蓬を秋になると風に吹かれて根から抜ける植物、つまりアカザ科のタンブルウィードとして考えていたことが分かる。

そして、最後に『楚辞』だが、『楚辞』は戦国の末期に屈原と宋玉や景差、唐勒らが作ったと伝えられている

「離騷」・「九歌」・「天問」・「九章」・「遠遊」・「卜居」・「漁夫」・「九弁」・「招魂」・「大招」に前漢末の劉向が自作の「九嘆」、賈誼の「惜誓」、淮南小山の「招隱士」、東方朔の「七諫」、嚴忌の「哀時命」、王褒の「九懷」を合わせて『楚辞』十六巻としたといわれている。また、後漢の王逸はさらに自作の「九思」を加えて注釈を施し、『楚辞章句』十七巻を著している。そのうち、「離騷」から「大招」にいたるまでを屈宋賦と称しているのだが、その屈宋賦の中には蓬の文字を見ることはできない<sup>30</sup>。ただし、前漢以降の作品にはいくつか見られたが、荒れ地に蔓延る雑草や根から抜け転がる植物、払邪の矢など、どれも今までに確認した文献での使われ方とほとんど同じであったのでここでは省略する。ちなみに、『周易(易経)』、『尚書(経書)』、『周礼』、『儀礼』、『春秋公羊伝』、『春秋穀梁伝』、『論語』、『孝経』、『孟子』、『老子』、『鬼谷子』、『孫子』、『韓非子』の中には蓬という文字は見られなかった。

#### 四

このように、古い文献を見ていくと古代中国の人々にとって蓬はまず何よりも、荒れ地に生えるありふれた雑草であったことが分かる。前で少し触れたが、このよう

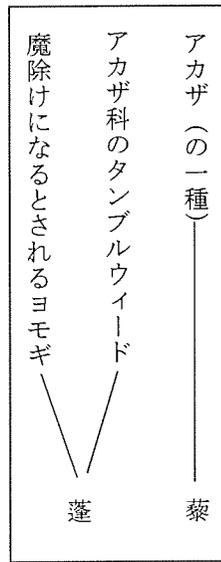
な荒れ地に蔓延る蓬のイメージから、手入れをしていないボサボサ頭のことを蓬髪と表現するようになったと考えられる。また、蓬戸や蓬屋など粗末なものに蓬という言葉を使うのもこのようなイメージが強く影響しているだろう。そしてさらにそれだけではなく、文献から蓬という言葉が「アカザ科のタンブルウイード」と「キク科ヨモギ属のヨモギ」の二つの植物の特徴を内包していたことも分かる。なぜ、このようなことが起きたのか。

古代は現在のように、植物の種類が詳細に分類されているわけではない。前述したように、キク科ヨモギ属の植物もアカザ科の植物も世界中に分布し多数の種類がある植物である。また、共に食用にも薬用にもなるなど共通点も多く、当然その分類には曖昧さがあつたと考えられる。また、広い中国では同じ言葉が同じものを指しているとは限らない可能性もある。私は今回、地方によって蓬は違う植物だったのではと考え調査したが、その答えを出すことはできなかった。ただし、タンブルウイードは中国でも北部で見られる植物であり、南部で作られたとされる『楚辞』の屈宋賦、つまりより古い時代に南部で作られた詩の中には蓬という字が見えないことは指摘しておく。

ここで注意しておきたいのは、荒れ地に生える雑草というイメージを持つのは藜という字も同じであるという

ことである。文献を見るに蓬と藜という字はよく並べて使用されており、古代中国の人々にとってこの二つは雑草といったとき真っ先にあがる植物であったことが分かる<sup>31)</sup>。藜はアカザを指しこの二つの植物が同じような所に生える植物であったことがうかがえる。だが、藜という字を文献の中で調べてみても、魔除けや転がるといった特徴は見受けられない。そういった特徴的な部分は全て蓬という字が負っているのだ。

おそらく、図鑑もない時代、植物の分類において重要なのは大きな特徴であり、



となっていたのではないかと考えられる。

中国で、ヨモギとアカザというتماず想起されるのが「蓬萊山」といった仙人に関係する言葉であるが、ここでのアカザは菜という字である。おそらく菜もアカザ科に含まれるどれかの植物を指していたのだと考えられる。蓬(ヨモギ)と菜(アカザ)の山と書く蓬萊山は、東海

の東にあつて不老不死の法を身につけた仙人が住んでいたと伝えられる伝説の仙山である。なぜ、仙人が住むといわれる山の名にヨモギとアカザがあるのか、このことについて永山久夫氏は、ヨモギの長寿効果、そして二者の繁殖力の盛んなことを不老不死に結びつけたものとしている<sup>32)</sup>。ヨモギの長寿効果に関しては、先に紹介した『西京雜記』の中に<sup>33)</sup>、

九月九日、佩茱萸、食蓬餌、飲菊華酒、令人長壽。

九月九日には、茱萸を身につけ<sup>34)</sup>、蓬餌を食べ、菊華酒を飲みましたが、こうすればその人は長生きできるとされています。

とある。アカザにも薬用効果は有り、二つの雑草の持つ旺盛な繁殖力と薬用効果にもたらされた長寿など、様々な要因が組み合わされ仙人に関係する言葉にヨモギとアカザが使われるようになったのだろう。

中国の古典詩は故事を踏まえながら自分の感情や情景を織り込んでいく手法をとることから、正確にどのようなものであるということより、テーマに沿うイメージがある題材を使う事が重要視されるといことは先に述べた。複数の植物の特徴を内包する蓬という字は、やがてそのそれぞれの特徴を取り出され、詩で使われる際の題

材として広く使われるようになっていったのだと私は考  
える。

注

- [1] 『日本の野生植物草本』Ⅲ 佐竹義輔ほか編 一九八一年 平凡社に拠る。
- [2] ヨモギの属名であるアルテミスシア (Artemisia) はこの月と豊稗の女神アルテミスシアに因む。
- [3] 『植物と行事』 湯浅浩史 一九九三年七月 朝日新聞社に拠る。
- [4] 『訳注 西京雜記・独断』 福井重雅 二〇〇〇年三月 東方書店
- [5] 『分類アイヌ語辞典』植物編・動物編 一九七五年一月 知里真志保 平凡社に拠る。
- [6] 『倭名類聚抄』の「艾」の項に「本草云、一名豎草 和名与毛岐 兼名苑云蓬、一名蕪」とあった。『兼名苑』とは唐代に作られたといわれる中国の語彙集で、『倭名抄』では多く引用されるが、現在は亡失して伝わらない。蕪にはいばらという意味があり「蕪門蓬戸」という言葉は貧家のことを表す。やはり、蓬に関わる言葉には、粗末や雑草といったイメージがつきまとう。また、『倭名類聚抄』以来と言われる間違いはこの他にも、白居易の詩の中にある紫陽花を間違ってアジサイにあてたというものもある。

紫陽花 白居易

何年植向仙壇上 早晚移栽到梵家 雖在人間人不識 与

君名作 紫陽花

この紫陽花は本来、ライラックを指していたのではないかと考えられている。

- [7] 「蓬とヨモギ」 牧野富太郎 『植物一日一題』 二〇〇八年二月 筑摩書房に拠る。
- [8] 『日本中国植物名比較対照辞典』 増渕法之 一九八八年六月 東方書店に拠る。
- [9] 『植物和漢異名辞林』 杉本唯三 一九八二年九月 第一書房に拠る。
- [10] 柳の種子は柳絮と呼ばれ、綿毛を持っており風に乗って飛んでいく。やがて風が静まると、地面に沈み、小振りのピンポン玉の大きさにまとまって、転がるようになる。日本の柳は目立つほど綿毛を形成しない種が多いため、日本ではあまり知られていない。
- [11] 注「8」、注「9」、『詩経』草木汇考』 吳厚炎 一九九二年一月 貴州人民出版社に拠る。
- [12] 『淮南子』下 新釈漢文大系 楠山春樹 一九八八年六月 明治書院
- [13] 「曹植呼嗟篇考」 植木久行 『中国古典研究』第二十号 一九七五年一月 早稲田大学中国古典研究会に拠る。
- [14] 『新牧野日本植物図鑑』 牧野富太郎 二〇〇八年十一月

月 北陸館

[15] 藜とは中国名でアカザ科の植物を指す。

[16] 「転がる蓬」 寺井泰明 『花と木の漢字学』 二〇〇〇年六月 大修館書店に拠るものだが、今回の調査では『本草綱目』の中にこのような記述は見つけることが出来なかった。

[17] 同 [7]

[18] 『朝日百科植物の世界』 VII 一九九七年一〇月 朝日新聞社に拠る。

[19] 『四部叢刊電子版』 日本語版 株式会社カイテル

[20] 十三経とは儒家の基本的な経書十三種類の総称であり、『周易(易経)』、『尚書(経書)』、『毛詩(詩経)』、『周礼』、『儀礼』、『礼記』(『大学』・『中庸』を含む)、『春秋左氏伝』、『春秋公羊伝』、『春秋穀梁伝』、『論語』、『孝経』、『爾雅』、『孟子』である。宋代に定められた。

[21] 『詩経』 上下 漢詩大系第一巻 高田真治 一九八六年九月 集英社

[22] 『礼記』 上中下 新釈漢文大系 竹内照夫 一九七九年三月 明治書院

[23] 莠とは、はぐさのことである。はぐさとは稲に似ているが、実ることのない雑草である。

[24] 『春秋左氏伝』 新釈漢文大系 鎌田正 一九八一年一〇月 明治書院

[25] マコモとは、沼沢地や河川の周辺に大群落をつくるイネ

科の多年草で、茎は太い肉質の根茎から立ち上がり、高さ1〜3メートルほどになる。長い線形の葉が多数密生する。マコモの実は食べられるが、かつて飢饉のときに救荒食に使われた記録があるくらいで、ほとんど実用にされたことはない。莖や葉にも使われた。

[26] 『管子』 上中下 新釈漢文大系 遠藤哲夫 一九九二年五月 明治書院

[27] 『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』 高馬三良 一九九九年九月 平凡社

[28] 五つの刑とは、墨(いれずみ)、劓(はなきり)、剕(あしきり)、宮(生殖器の処分)、太辟(死刑)の五つをさす。

[29] 『戦国策』 上中下 新釈漢文大系 林秀一 一九八八年七月 明治書院

[30] 『楚辞』 漢詩大系第三巻 藤野岩友 一九六六年四月 集英社に拠る。

[31] 「蓬」と同様に、注 [19] の『四部叢刊電子版』を用いて、古い文献に登場する「藜」について調査した。

[32] 『日本古代食辞典』 永山久夫 一九九八年一月 東洋書林

[33] 同 [4]

[34] 茱萸とは、ぐみ・かわはじかみのこと。強い香りと赤い色に邪気悪霊を追い払う力があるとされた。